



Title	『朱子語類』訳注卷一一三 訓門人一 1~10
Author(s)	垣内, 景子
Citation	明治大学教養論集, 318: (101)-(117)
URL	http://hdl.handle.net/10291/5119
Rights	
Issue Date	1999-01-30
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

『朱子語類』訳注 卷一一三 訓門人一 1～10

垣内景子

はじめに

本稿は、朱子学の祖・朱熹（一一三〇～一二〇〇）の言葉を門人たちが記録した語録『朱子語類』（以下『語類』と略称）の翻訳・注釈である。『語類』は全一四〇巻と大部なもので、その訳注は以前から全国のあちらこちらで部分的に行われているが、全訳の完成にはあと何十年かかるかわからないというような状況である。『語類』の全訳、それは夢のような話としてのみ、中国思想研究者の間で話題にされてきたように思われる。しかし、私は『語類』の全訳こそが朱子学研究の急務であると考え、微力ながらその任を担う一人になりたいと願う者である。全一四〇巻のうち私が一生の間に翻訳できる量が果たしてどれだけのものになり得るか、甚だ心許ない限りではあるが、ここにそのささやかな第一歩を踏み出したいと思う。

この度始める翻訳について、私が最もこだわったのは、翻訳だけを通読できる、即ち原文を横目で見つつ注釈をいち

いち参照にしなくとも訳文のみを読み通せるようにしたいということである。中国古典の訳注は、伝統的に、原文を載せ、書き下し文を付し、通釈を試み、更にそれに語釈や出典を付けるという形式が一般的である。これは、漢字の共有と漢文の伝統の為せるわざで、それ自体悪いとは思わないのだが、でき得ることならば、漢文の呪縛から離れて完全な現代日本語へと翻訳し、時代がかった漢文の素養無しでもそれなりに読み通せるものになりたいというのが私の大それた目標である。門外漢の自分が西洋哲学の翻訳を読み、何かしらの啓発を受けるように、全く別の分野の人が『語類』を読んで何かを見つけ出してくれたならば、朱子学研究にとっても意義のあることになるのではあるまいか。とはいっても、実際に翻訳を試みて、それが如何に難しい作業であるかを痛感した。漢文の呪縛は予想以上に強力なものであった。以下、その問題点と本稿に於ける方針とを述べておきたい。

第一は、朱熹たちの会話にちりばめられている「典拠のある言葉」の翻訳である。経書を中心とする膨大な過去の文献の知識を駆使することにその存在根拠を得ていた朱熹たち士大夫（知識人）の会話は、形式の上からも引用とわかる箇所だけでなく、引用の形式をとらない「典拠のある言葉」にも満ちている。これらの言葉を、朱熹たちの地の言葉と同じ文体で翻訳してしまつては、会話に込められたニュアンスを著しく損なうことになりかねない。そこで、本稿では多少の読みにくさは承知の上で、敢えて引用部分は伝統的な書き下し文の文体を用いた。現時点での私の文章力では、漢文書き下し文の重々しさを利用する以外に手が無い故である。但し、朱熹と近い時代の人物（例えば北宋の二程子）の言葉の引用については、現代語に訳した。

第二は、所謂朱子学のタームに属する言葉の翻訳である。「理」や「氣」といった言葉は、朱熹たちにとっては日常語と連続した概念語であり、その連続性を正しく読みとることこそが、思想の本質の解明には不可欠なことであるのだが、我々日本人はこれらの言葉を中国語から得たという経緯はあるものの、今となっては日本人独自の概念をこれらの

言葉に付してしまっている。従って、「理」を理と表記することは、日本語の理との混同を避けがたい。そうかといって、「理」の意味を完全に覆う別の日本語の言葉を探してそれに置き換えることは、より大きな困難と混乱が予想される。従って、これも善後策ではあるのだが、本稿では「」を付することによってタームであることを喚起し、原語をそのまま用いることにする。注釈の中で、いくつかのタームについては私なりに解説を試みたが、本来はこの『語類』の翻訳全体を通してその意味を読みとるべきもので、予めの定義はかえって有害無益かもしれない。

以上が、本稿に於ける翻訳の基本方針である。前述したように、本来は翻訳だけをここに掲げたかったのであるが、私の翻訳能力の限界故に、原文と注釈をしっぱのよう後ろにまとめて付すという中途半端な形式になってしまった。出典調べの手間を省くために利用して頂きたい。今後はより有益な形式とより良い翻訳を目指して継続してゆきたい所存である。翻訳・注釈の当否は勿論のこと、訳注全体の形式に関する御指摘・御教示を賜れば幸甚である。

なお、本稿は中華書局理学叢書『朱子語類』を底本とし、適宜朝鮮本（『徽州本朱子語類』中文出版社）を参照した。参考文献は、原文・注釈の前に一覧表を掲げる。

【一三・一】

質問『氣質』の弱い者は、どのように『涵養』すれば強くなれるのでしょうか。朱子「意識してそう努めるだけだ。ただ『氣質』を変化させるのは最も難しい。」

○以下は全て、門人の廖徳明との問答である。

【一一三・二】

朱子「今の学ぶ者はみな書物の上であれこれ考えるだけで、本質的なところで理解せず、文字の上だけの議論をして、我が身我が心と全く結びついていない。我が身我が心をこそ根本にしなければならないのだ。」徳明「以前に、読書による探究と心の『涵養』とを車の両輪のごとく常に並行して、いずれか一方をも廃してはならない、との教えを承りましたが：」朱子「もしも文字の上だけで理解して、『涵養』するということを知らなければ、それは一輪車で、一輪では車は動かない。」徳明「逆に『涵養』だけを論じて、読書による探究をしなければ、確かに邪心を防ぎ正しい心を保ち、『忿（いか）りを懲らし、慾（よく）を窒（ふさ）ぐ』ことはできるかもしれませんが、事柄に対処して誤った時には、どうしたらよいのでしょうか。」朱子「誤った時のことはともかくとして、それ以前にたとえば『居処には恭に、事を執りては敬に』とあるように、もしも『恭敬』でなければ、人は放恣になってしまうものだ。こういったことは分かり易いことなのに、人はすぐ放恣になり、『恭敬』でなくなる。譬えていえば、大きな正しい公道が目の前にはっきりとあるのに、それを行こうとしないで、自分の家の私道とつながる細い道を探し求めてそれを正しい道だと称しているようなものだ。今の人たちはみなそうだ。」

【一一三・三】

質問「意識が『未発』の状態に於いて『涵養』し、不善の端緒をそのつど消していくのは、努め易いことですが、意識が発した後では制御するのが難しいのですが。」朱子「聖賢の議論は、正にその発したところを如何に制御するかを問題にしている。子思だけが『喜怒哀楽の未だ発せざる、これを中と謂ふ』と、『未発』に言及しているのだ。孔子や孟子が人を教える場合にも、多くは発した場面について説いている。『未発』の時にはもちろん『涵養』しなければならぬが、まさか発した後はもうどうにもならないとは言えない。」徳明「そのところが最も難しいのです。」そこで横渠の「戦退」の説が取り上げられた。朱子「これもやはり難しいことではない。ただ善悪ということだけを明らかにし、日々事柄に遭うことに実際に体験してゆくことだ。善だと分かれば、それに従いそれを大切にしていけば、自然に悪の方へは心が動かなくなる。」

【一一三・四】

翌日また先生は言われた「水は源が清ければ流れも清いように、意識の源である『未発』の状態をこそ『涵養』しなければならぬのだが、水源の清さは確かめようもなく、それが流れ出した時にはすでに濁ってしまっている場合がある。逆に流れの濁りによって源が清くないことを知るべきであって、このように本源のところまで理解しなければならぬ。」

い。源が濁っているのに流れが清いことはあり得ないし、流れが濁っているのに源が清いこともあり得ない。今の人たちは『未発』か『已発』のどちらかに偏ってしまっている。『未発』を『涵養』するばかりで、『已発』における過ちを制御できないのは、静の時はよいが動の時はだめということ、逆に『已発』を制御することを知らなければ『未発』の時に『涵養』できないのは、動の時はよいが静の時はだめということだ。」

【一一三・五】

質問 「先生の経書の御解釈を拝見し、大意はほぼつかめたのですが、まだじっくりきけません。」朱子 「熟読するしかない。」また言われた「しばらく経書の本文をじっくりと声に出して読むことだ。そうすれば自然に味わいが生まれてくる。解らないところがあれば、その都度書き抜いておいて、他日また繰り返し考えるのだ。」

【一一三・六】

徳明 「喪礼・祭礼を編集するのに、先生の御教示の通り、『儀礼』を本とし、『戴記（＝礼記）』を注釈とし、『周礼』を傍証とするつもりです。」朱子 「『通典』も合わせて見なければならぬ。特に更革（制度の变革）を論じたところだ。」言い終わると又言われた「君はもっと自分自身に切実なところに力を注ぐべきだ。そんなふうに書物の字ずらばかりを

追いかけて、あれこれ関心を分散させても、何にもならない。孔子は『操れば則ち存し、舎つれば則ち亡ぶ』といっているし、孟子も『学問の道は他無し、其の放心を求むるのみ』といっている。そういうふうに関心は自分自身でやっていかなければいかん。程子は『心は自分の身体の内になければならない』、つまり外のことに関心を奪われて自分自身の内面を疎かにしてはいけな^いと言っている。この心というものは、きちんと気を配ってこそ在るものだ。例えば、曾子は礼に關する細かいことは何もかも理解し尽くしていたが、孟敬子に語った時には『容貌を動かせば斯に暴慢に遠ざかる。顔色を正しくすれば斯に信に近づく。辞氣を出だせば斯に鄙倍を遠ざく。邊豆の事は、則ち有司存す』と言っている。つまり、何が大切か、何を先とすべきか、何が根本で何が末節かという区別が必要だということだ。自分の心を如何にして在らしめるかということ先ず根本とすべきなのであって、その上で書物を順々に読んでいくからこそ有益なのであり、それこそが物事の順序というものだ。そうやってひたすらあれこれと濫読していても、結局何にもなりはしない。『行ひて余力有らば以て文を学べ』だ。『道に志し、徳に拠り、仁に依り』その後で『藝に遊ぶ』のである。そうやって書物の上げかりで理解しようとするから、何事もなっていないのだ。」又言われた『克己』ということにこそ努力しなさい。」

【一一三・七】

先生は『程氏遺書』の「樹木の根元に土や肥料を施すように、根本を先ず十分養ってこそ、学問の方向がはっきりする」や「学ぶ者はこの自らの心を慎重に守って、焦ったりせず、じっくりと養い育てて、心に於いて涵泳してこそ、自

ら得るところがある」という言葉を取り上げて、次のように言われた。「先ず取りあえずは自分の心を収斂して、常に意識を喚起し詳しく観察することだ。例えば坐って時事を語っている時に、他人があれこれ言うのに合わせてひたすらしゃべっていても、何にもなりはしない。すばっと判断して、心を喚起し在るべき所に在らしめなければならぬ。物事に対処する場合は全て同じことだ。」質問「役人をしていまずとあれこれ事柄が多く、ごたごたしてしまうのですが、どうしたらよいでしょうか。」朱子「ごたごたするのは事柄の方で、それが自分の心と何の関係があるか。周濂溪は『これを定むるに中正仁義を以てして静を主とす』と云っている。『中』と『仁』とは心が動く起点になるところ、『正』とはそうであるべき定まった理、『義』はすばっと判断する根拠、そして常に『静』ということの主としなければならぬのだ。どうしてひたすら心を放ちやっってしまったら収斂させないでよかろうか。すばっと判断するということが最も肝要だ。」

【一一三・八】

（7条の続き）再び朱子「根本を十分養って豊かでしつかりしたものにしなければならぬ。その上で夏・殷・周三代以降の書物を学び、古今の世変治乱存亡などを、全て理解しなければならぬ。今ただそこらの教冊を読むにも中途半端で、例えば礼に関する書物を編纂すると言いつつ完成させることができないのは、やはり根本である自分の心がしつかりしていないからだ。じっくり養って豊かで大きなものにしなければならぬ。呂子約の『三代以降の書物を読む』云々の説も、やはり意味があるのだ。要するに書物があればそれを読み、事柄があればそれを処理しろということだ。」

質問「五倫五常の変わらぬ掟も、仁義礼智という人間の本来的道德性も、その根源を尋ね求めて、本来それは全て自分に固有のものだとわかりますと、日常のあらゆる秩序は自ずから正しくなります。少しでも正しくないことがあるとすれば、それは私欲に覆われてしまっているからに過ぎません。やはり『慾（よく）を窒（ふさ）ぐ』ということが肝心かと存じますが……」朱子「私欲に惑わされればその分だけ理解が欠け、逆に理解に欠けたところがあれば私欲に打ち勝つことはできない。とことんまで理解が徹底すれば、私欲は自然に留まっていられなくなるものだ。だから大切なのは『知を至す』、即ち知的な理解を徹底するということで、『知』が『至』れば『意は誠に』『心は正しく』へと自然に進んでゆく。」そこでまた実際に虎に傷つけられたことのある人が虎の恐ろしさを知っていることと、知識として虎の恐ろしさを知っていることとの違いの話が取り上げられた。そこで私（徳明）は何度も自分の考えを反芻し、「太極の動静」や「陰陽五行」、「仁義中正」が「静を主とする」所以などの問題について教えを乞うた。朱子「そう言われているようだし、人間の思索もそこまでしか至らないのだろう。しかしまあ、それ以上のことは、考えようがない。これこそが『これに従はんと欲すと雖ども、由るなきのみ』というやつだ。とにかく『時に習ふ』ようにして、常に読書し、常に徹底して議論し、いつもその問題を忘れないようにしていれば、しばらくして自然に解ってくるだろう。」

【一一三・10】

徳明「山に居るのはとても快適で、読書に疲れた時山水に親しみますと本当に楽しく感じます。」朱子「そんなふう
にのんびりぶらぶらしてばかりいてはならん。読書をしなければいけない。」先生は又昔は定職のないぶらぶらしてい
る人はいなかったことを話された。先生の話はとても長いものだったので、全部記録していないが、その大意は、のん
びりぶらぶらして感じる楽しさは虚なる楽しさで、実なる楽しさではないということだった。

〔原文・注釈〕

参考文献及び略称一覧

- 『朱子門人』陳栄捷 台湾学生書局：『門人』
- 『宋人伝記資料索引』中華書局：『資料索引』
- 『宋元学案』中華書局：『学案』
- 『宋史』中華書局：『宋史』
- 『河南程氏遺書』中華書局理學叢書：『遺書』

【一一三・1】

問「氣質弱⁽¹⁾者、如何涵養到剛勇⁽²⁾？」曰「只是一箇勉強⁽³⁾。然變化氣質最難。」〔以下訓徳明⁽⁴⁾。〕

(1) 氣質 人間の持つて生まれた資質・性格・肉体的特徴、更に夭寿・幸不幸などの運命の差異は、全て「氣質」の差異に因るとされる。儒教の伝統的「性善説」を前提とする朱子学に於いて、人間は誰もが平等に純善なる「性」(「仁義礼智信」に総称される道徳性)を賦与されて生まれてくるが、現実の人間に不善・悪があるのは、「氣質」に不可避的に影響されるからであると考えられる。しかし、人間は後天的努力によって自らの「氣質」を変化させ、本来の善なる「性」を十全に発揮することができる。「氣質」或いは「氣質を変化する」ということを積極的に主張したのは、所謂北宋の道学者たちであるが、「氣質」という概念が導入されたことによって、現実の人間の不善や多様性の説明が可能になり、同時にその克服としての努力・学問・教育の存在価値が明確にされることとなった。

(2) 涵養 人間が本来持っている善なる「性」を養い育てる方法。「氣質」を変化させ、「性」を発揮するための努力として、朱子は二つの「性」へのアプローチの方法を提示する。一つは、自らの内なる「性」そのものを対象にするのではなく、万人の「性」と同じように万事万物それぞれが有している「性」||「理」を客観的になどることによって「性」||「理」のパターン性を認識し、結果的に自らの「性」を発揮させる「格物窮理」という方法、もう一つが人間の意識が特定の対象に向かって動く以前の状態(「未発の中」)を「性」の有り様として想念し、そのイメージを養い育てる「涵養」である。「涵養」という方法の絶妙な点は、「性」という、人間が本来持っているが常に未だ実現されざる内なるものに対し、非直接的に作用し、結果的にそれが発揮されるよう条件を整えるということにある。朱子は更に程頤の「涵養はすべからく敬を用ふべし」に依って「涵養」のより具体的な方法として「敬」を主張する。

(3) 只是一箇勉強 「勉強」は所謂学習の意味ではなく、無理をすること、強制すること。「勉強」という作爲的意識は、修養の目的である聖人の境地としては斥けられるが、現実的な実践段階(学ぶ者の段階)では逆に肯定される。「勉強」が繰り返され、習慣化することによってその作爲性が消えた時、学ぶ者は聖人になる。

(4) 徳明 廖徳明、字子晦。『門人』287頁。

【一一三・2】

「今学者皆是就冊子上鑽、却不就本原处理会、只成講論文字、与自家身心都無干涉。須是将身心做根柢。」徳明問「向承見教、須一面講究、⁽¹⁾一面涵養、如車兩輪、廢一不可。」曰「今只就文字理会、不知涵養、便是一輪転、一輪不転。」問「今只論涵養、却不講究、雖能閑邪存誠、⁽²⁾『懲忿窒慾』、至処事差失、則奈何？」曰「未説倒差処、且如所謂『居処恭、執

事敬⁽³⁾、若不恭敬⁽⁴⁾、便成放肆。如此類不難知、人却放肆不恭敬。如一箇大公至正之路甚分明、不肯行、却尋得一線路与自家私道合、便称是道理。今人每每如此。」

(1) 講究 外的な「理」をなどる「窮理」の実践のことで、具体的には経書を読むことが主となるが、「講究」「講論」「講学」というように「講」の字で表される場合には、学ぶ者同士の口頭での議論のイメージが含まれる。この条に見える「講究（窮理）」と「涵養」、即ち読書及びその解釈をめぐる他者と議論と内的な心の修養との対比は、朱子が両者の並行を強調するにもかかわらず、朱子以降他の学派の学問を評価・批判する際の枠組みとなる。たとえば、朱子は最大の論敵陸象山を、前者の実践を著しく欠いたものとして批判し、陸象山は朱子を前者にのみかかずらうものとして非難する。後世、一般に朱子学は、前者に偏ったものとして一貫して批判され、朱子が両者の並行にこそ見出した実践的価値、その上での前者を強調する傾向の意義は往々にして見過ごされる。

(2) 懲忿窒慾 『易』損・象伝。

(3) 居処恭執事敬 『論語』子路篇。「家に居る時は恭しく、事を行う際には慎重に」。この言葉は、「敬」という概念を実践方法にまで練り上げた道学者たちが好んで引用するものである。「敬」の本来の意味は、「つつしむ・うやまう」である。

(4) 恭敬 朱子は前掲の『論語』の箇所の注釈で、「恭」は外に表れた目に見えるもの、「敬」は内面的なものとして区別している。

【一一三・三】

問「涵養於未発⁽¹⁾之初、令不善之端旋消、則易為力、若発後⁽²⁾、則難制。」曰「聖賢之論、正要就発処制。惟子思説『喜怒哀楽未発謂之中』。孔孟教人、多從発処説。未発時固当涵養、不成発後便都不管。」徳明云「這処最難。」因拳横渠「戦退⁽³⁾」之説。曰「此亦不難、只要明得一箇善惡。毎日遇事、須是体験。見得是善、從而保養取、自然不肯走在惡上去。」

(1) 未発 下文の朱子の言葉にあるように、子思の作とされる『中庸』の語を典拠とする。喜怒哀楽に代表されるような意識の発

動以前の状態を指し、その「中」なる状態、即ち意識が外的な具体的な事柄にとらわれていないニュートラルな心の状態にこそ、人間の本来の善なる「性」を実感する手がかりがあるとされ、「未発の涵養」が「性」の十全なる發揮の主要な実践方法となる。

(2) 発後「未発」に対して「已発」と呼ばれ、意識が具体的な対象に向けて発動した以後を指す。絶対善なる「性」に限りなく類似した「未発」の状態に比較して、より現実的な意識活動の場を示す「已発」時にはもちろん善と悪とが混在する。

(3) 横渠戦退之説 横渠は北宋の道学者・張載（一〇二〇～一〇七七）の号。『資料索引』三巻2297頁。『宋史』卷四二七。『学案』卷十七。「戦退之説」が何を指すかは未詳。

【一一三・4】

次日又云⁽¹⁾「雖是涵養於未発、源清則流清、然源清則未見得⁽²⁾、被它流出来已是濁了。須是因流之濁以驗源之未清、就本原処理会。未有源之濁而流之能清者、亦未有流之濁而源清者、今人多是偏重了⁽³⁾。只是涵養於未発、而已発之失乃不能制、是有得於静而無得於動⁽⁴⁾、只知制其已発、而未発時不能涵養、則有得於動而無得於静也。」

(1) この条は【一一三・3】を承けたもの。

(2) 源清則未見得 水の源の清濁は直接確かめられず、流れの清濁によってこそ知ることができるとするのは、未発という意識活動以前の心の状態を、意識が対象化するということの矛盾を自覚した上での発言である。

(3) 今人多是偏重了 未発か已発のどちらかに偏るといふ弊害は、朱子自身の思想形成の課題でもあった。朱子は四十歳の時に、未発と已発を偏りなく貫通する実践方法として「敬」を提出し、心性論と実践（工夫）論の定論を確立する。

(4) 有得於静而無得於動 未発已発はしばしば静動によって表現される。未発という概念は性||理という絶対静を透視すべきものであるとはいえ、人間の意識活動はいかに静的であっても意識活動自体を否定しない限りは突き詰めたところ已発に他ならないが故に、未発已発は現実的には相対的な静時（無事時）動時（有事時）に還元されざるを得ない。

【一一三・五】

問「看先生所解文字、畧通大義、只是意味⁽¹⁾不如此浹洽。」曰「只要熟看。」又云「且將正文熟誦、自然意義生。有所不解、因而記錄、它日却有反復。」

(1) 意味 日本語の「意味」よりも味わい・趣に重点がある。下文の「意義」もここでは同様のニュアンスで使われているものと思われる。

【一一三・六】

徳明問「編喪・祭礼、当依先生指授、以『儀礼』為經、『戴記』為伝、『周礼』作旁証。」曰「和『通典』也須看、就中却又議論更革処。」語畢、却云「子晦正合且做切己工夫、只管就外辺文字上走、支離雜擾、不濟事。孔子曰『操則存、舍則亡』⁽¹⁾。孟子曰『学問之道無他、求其放心而已矣』⁽²⁾。須如此做家計。程子曰『心要在腔子裏、不可驚外』⁽³⁾。此箇心、須是管著他始得。且如曾子於礼上纖細無不理會過。及其語孟敬子、則曰『動容貌、斯遠暴慢矣、正顔色、斯近信矣、出辭氣、斯遠鄙倍矣。邊豆之事、則有司存』⁽⁴⁾。須有緩急先後之序、須有本末、須將操存工夫做本、然後逐段逐義去看、方有益、也須有倫序。只管支離雜看、都不成事去。『行有余力、則以学文』⁽⁵⁾『志於道、拠於徳、依於仁』、然後『遊於藝』⁽⁶⁾。今只就冊子上理會、所以每每不相似。」又云「正要『克己』⁽⁷⁾上做工夫。」

(1) 孔子曰操則存舍則亡 『孟子』告子上。「心は自分が氣を付けなければ在らしめることができるが、放っておくと無くなってしま

(2) 孟子曰『求其放心而已矣』 『孟子』告子上。「学問の道とは、どこかへ行ってしまった自らの（良）心を求めること以外の何者

でもない。」

(3) 程子曰「不可驚外」『程氏遺書』卷七・10条。

(4) 曾子「邊豆之事則有司存」『論語』泰伯。「立ち居振る舞いを整えれば粗暴さから遠ざかる。顔つきを正しくすれば誠実に近づく。言葉づかいを整えれば俗悪なるものを遠ざける。礼とはこの三つのことが大切なのであって、細かな祭祀の器物のことなどは専門の係りがいる。」

(5) 行有余力則以学文『論語』学而。「正しい行動に努めて、その上でまた余力があれば詩書六藝などの書物を学べ。」

(6) 志於道「遊於藝」『論語』述而。「人として踏み行うべき道に志し、自分自身の心に在る道を堅く守り、仁徳に違わないようにし、詩書六藝の書物を玩味する。」

(7) 克己『論語』顔淵。「私利私欲に打ち勝つ。」

【一三・七】

先生挙『遺書』云「根本須先培壅然後可立趨向」⁽¹⁾、又云「学者須敬守此心、不可急迫、当栽培深厚、涵泳於其間、然後可以自得」⁽²⁾。「今日要収斂此心、常提撕省察。且如坐間說時事、逐人說幾件、若只管說、有甚是處。便截断了、提撕此心、令在此。凡遇事応物皆然。」問「当官事多、膠膠擾擾、奈何。」曰「他自膠擾、我何与焉。濂溪云『定之以中正仁義而主静』、『中』与『仁』是發動處、『正』是当然定理處、『義』是截断處、常要『主静』。豈可只管放出不収斂。『截断』二字、最緊要。」

【注】

- (1) 遺書云「可立趨向」『程氏遺書』卷六・113条。
- (2) 学者須「可以自得」『程氏遺書』卷二上・14条。
- (3) 濂溪云「主静」周敦頤(濂溪)『太極図説』

【一一三・八】

又云「須培壅根本、令豐壯。以此去理會學、三代以下書、古今世變治亂存亡、皆當理會。今只看此教書、又半上落下。且如編禮書不能就、亦是此心不壯、須是培壅令豐碩。呂子約『讀三代以下書』之說⁽¹⁾、亦有謂。大故有書要讀、有事要做。」

(1) 呂子約讀三代以下書之說 呂祖儉、字子約、金華の人。朱熹の親友の一人呂祖謙の弟。『門人』103頁。『資料索引』二卷1211頁。『讀三代以下書之說』は未詳。

【一一三・九】

問「五典之彝⁽¹⁾、四端之性⁽²⁾、推尋根源、既知為我所固有、日用之間、大倫大端⁽³⁾、自是不爽。少有差失、只是為私欲所撓、其要在『窒慾』⁽⁴⁾。」曰「有一分私慾、便是有一分見不尽、見有未盡、便勝他私慾不過。若見得脫然透徹、私慾自不能留。大要須是『知至』、才『知至』、使到『意誠』⁽⁵⁾、『心正』⁽⁶⁾一向去。」又舉虎傷事。當時再三深思所見、及推『太極動靜』、『陰陽五行』与夫『仁義中正之所以主靜』者⁽⁷⁾求教。曰「捫說、亦只是如此、思索亦只到此。然亦無可思索。此乃『雖欲從之、末由也已』⁽⁸⁾處。只要『時習』⁽⁹⁾、常讀書、常講貫、令常在目前、久久自然見得。」

(1) 五典之彝 『書』舜典「慎徽五典、五典克從」、孔伝「五典、五常之教。父義、母慈、兄友、弟恭、子孝」。蔡沈「五典、五常也。『父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信』(『孟子』滕文公上)、是也。」

(2) 四端之性 『孟子』公孫丑上「惻隱之心、仁之端也。羞惡之心、義之端也。辭讓之心、禮之端也。是非之心、智之端也。人之有是四端也、猶有四体也。」

- (3) 大倫大端 「大倫」は人倫的秩序の大項目。「論語」微子「…欲潔其身、而乱大倫」。(朱注「倫、序也。人之大倫有五、『父子有親、君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信』是也。」)又一方で「大端」と同じような意味でも用いる。「礼記」学記「…此七者、教之大倫也」。「大端」は大原則、主要な端緒。「礼記」礼運「故欲惡者、心之大端也」。(孔穎達疏「端、謂頭緒。」)
- (4) 窒慾 『易』損・象伝「…君子以懲忿窒欲」。
- (5) 知至く意誠心正 『大学』経一章「…物格而后知至、知至而后意誠、意誠而后心正、…」。
- (6) 虎傷事 『遺書』卷二上・24「真知与常知異。常見一田夫、曾被虎傷、有人說虎傷人、衆莫不驚、独田夫色動異於衆。若虎能傷人、雖三尺童子莫不知之、然未嘗真知。真知、須如田夫乃是。故人知不善而猶為不善、是亦未嘗真知。若真知、決不為矣。」卷十五・36条、十八・25条にも同じ話が見える。
- (7) 太極動静く所以主静者 周敦頤『太極図説』。
- (8) 雖欲從之末由也已 『論語』子罕。「(先生〓孔子に)ついてゆきたいと思つても、そのよるべき手だてがない。」
- (9) 時習 『論語』学而「学而時習之、不亦說乎。」(朱注「習、鳥數飛也。学之不已、如鳥數飛也。…既学而又時時習之」)

【一三・10】

問「山居頗適、読書罷、臨水登山、覺得甚樂。」曰「只任閑散不可、須是読書。」又言上古無問民⁽¹⁾。其說甚多、不曾記錄。大意似謂閑散是虚樂、不是実樂。

- (1) 問民 『周礼』天官・大宰「九曰問民、無常職、轉移執事。」(注…鄭司農云、…問民、謂無事業者、轉移為人執事者、今備質也。)

(かきうち・けいこ 文学部専任講師)